

設楽発掘通信

No.8
平成27年
1月15日号

平成二十六年年度の発掘 調査終了



平成26年度発掘調査成果報告会のご案内

日時 平成27年3月8日（日）午後1時30分～午後3時30分（受付は午後1時から）
 場所 設楽町役場 議場（予定）
 内容 平成26年度に行われた発掘調査成果などの報告と出土遺物の展示
 参加は無料です。
 詳細につきましてはチラシ・ポスターなどで再度ご案内いたします。

平成二十六年年度の設楽ダム関連の発掘調査は、五遺跡の範囲確認調査と万瀬遺跡と西地・東地遺跡の本調査を行ってききましたが、ようやく一月上旬に現地にて記録を取る作業を全て終えることができました。調査に際しては多くの皆様のご支援とご協力を賜りまして、ありがとうございました。現在は出土遺物やデータの整理作業と現地の撤収作業を行っているところです。今月末頃には、万瀬遺跡の近くに設営した設楽詰所（川向所在）も撤去する予定です。

さて、最後まで残りました西地・東地遺跡（大名倉所在）の発掘調査では、特にB区で竪穴建物跡5棟などをはじめとして多くの縄文時代の遺構が確認され、極めて重要な調査成果となりました。詳しい内容につきましては二頁以降をご覧ください。

なお、これまで紹介してきました内容も含め、設楽ダム関連の発掘調査の成果を報告する成果報告会を三月八日（日）に開催することになりました。現地調査と二次整理が終了した段階で、それぞれの遺跡がどのような歴史を明らかにしてきたかをまとめて発表いたしますので、ぜひご参加ください。

現地での発掘調査が終了するに伴い、この設楽発掘通信は本号が今年度の最後となりました。来年度（平成二十七年）も設楽ダム関連の発掘調査が予定されていますので、設楽発掘通信も六月頃には再開したいと考えております。

（愛知県埋蔵文化財センター 鈴木正貴）

にしじ ひがしじ 西地・東地遺跡B区について

西地・東地遺跡B区(大名倉所在)では全ての遺構面の調査も終わり、その全容がほぼ明らかになりました。特に二面目となる縄文時代の遺構面では様々な発見がありました。

縄文時代の検出面では竪穴建物跡が五基見つかリ、三基は石囲炉のみが残存していました。さらに埋設された土器を四基(この中には、後述するように、炉内に埋設された土器や埋喪と呼ばれるものも含まれています)、袋状土坑を三基以上確認しました。

石囲炉三基のうち二基では土器の大型破片が敷かれていることも確認しました。石囲炉を伴う三基の竪穴建物跡は全てB区の北西部で検出されました。これらの時期は縄文時代中期後半(およそ五千年前)と考えられます。

また、B区の中央部では、炉内に埋設された土器のある竪穴建物跡が見つかりました。この建物跡の炉跡は長方形石組炉と呼ばれ、北側に大きく平らな石が設置してあり、その周囲を小礫で囲う構造になっていました。石組み中央には土器が入れ子状に埋設されています。一方、南端部にある竪穴建物跡の西端で見つかった土器埋設遺構(埋喪)は、完全な形で出土し、石で蓋をされた上、底部が穿孔されていることがわかりました。この建物跡では土器細片が敷かれた炉跡(土器敷炉跡)も確認されています。これらの遺構は縄文時代中期末から後期初頭(今から四千四百年前)のものと考えられます。

これらの遺構が同じ時期に機能し、集落を形成していたのか、別時代のもので一時的な生活の拠点としていたかはこれから出土した土器を調査することにより判明していくと思われます。
(ナカシャクリエイテブ株式会社 後藤太一)

右頁で触れた縄文時代の遺構について、ここで改めてご紹介します。これらは、縄文時代中期後半から後期初頭(およそ五千年、四千四百年前)の時期に営まれたものです。

○竪穴建物跡 縄文時代の建物跡には、半地下式にする竪穴建物跡、掘り込みをせず壁を地表に立てる平地式、さらに高床にする掘立柱式の三種類が知られています。竪穴建物跡が最も一般的で、上から見た形は、円形や四角形が多く、大きさは径5m前後です。建物の内部からは、柱穴跡や炉跡が見つかります。西地・東地遺跡も同様です。

○炉跡 建物内の火床の跡で、生活する上で最も重要な施設であったといえます。今回見つかったものは、石囲炉跡三基、土器敷炉跡一基、長方形石組炉跡一基です。石囲炉は、川原石で二辺五十cmほどの方形に組み立てられています。中に土器の大型破片が敷かれているものもあります。土器敷炉跡は、土器細片を炉床に敷いたものです。長方形石組炉跡は、長方形に川原石が組まれた中に、一端には作業台となる大きな台石が別の一端には入れ子状にした土器が埋設されているものです。埋設した土器の脇には、別個体の土器片が炉床に敷かれており、土器敷炉跡と同様の作りとなっていました。

○埋喪 土器が埋設された遺構を土器埋設遺構と呼びますが、その中でも、竪穴建物跡の縁に埋設されたものは特に埋喪と呼ばれており、今回の調査で一基見つかりました。死産児など不幸にして生まれてこなかった子供の亡骸を入れ、住居の入口に埋設することで、魂を母親の胎内に帰す思想を示すという説が有力です。

○袋状土坑 縄文時代によくみられる土坑の一種で、断面は口が狭く底が広い袋のような形をしています。ドングリなどの貯蔵用と考えられます。今回の調査でも辛うじてドングリの形がわかるものがごくわずかですが見つかりました。また、土器片や磨製石斧などが多量に出土した袋状土坑もありました。(愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁)



石囲炉跡の検出状況



埋喪が見つかった竪穴建物跡
(中央の赤い部分が土器敷炉跡で、写真は土器細片を取り上げた状態のものです)



長方形石組炉跡のある竪穴建物跡



石囲炉跡 (炉内に土器片があります)



埋喪の埋設状況
(板状の礫で蓋をしています)



長方形石組炉跡
(写真の右上端に台石、中央に土器が埋設されています)



袋状土坑の土層断面写真1
(土器片を多く含んでいます)



袋状土坑の土層断面写真2

にしじ ひがしじ 西地・東地遺跡A区調査について

十一月の終わり頃から西地・東地遺跡A区の調査も本格的に開始しました。まず、調査区の東側から表土掘削（遺跡に関係のない表面の土を取り除く作業）を行ったところ、近代以降の盛土の下から、陶磁器片や六文銭（寛永通宝）が出土しました。タガと思われる植物質のものもわずかながら確認されたことから、B区東壁で確認された桶埋設遺構（木桶の中に遺体が埋葬されていた）と同様のものと考えられます。その他、遺構外からキセル（副葬品としても使用される）も出土しており、近代以降、A区周辺は墓域であったと考えられます。

これらの遺物は、大礫を多く含む、ボソボソした土の上面より出土しました。A区の大部分に堆積するこの土は、土石流に由来するものと考えられ、深いところで現在の生活面から3m近く堆積しています。この厚い土石流堆積層を全て取り除くことは難しいため、A区中央に大規模なトレンチを設定し、土石流堆積層内、またはその下層からの出土遺物の有無を確認しました（写真2）。結果、いずれからも遺物は出土せず、過去の人々の生活痕跡は希薄と判断しました。A区北西側の斜面部分には土石流の堆積はなく、その下層にあたる暗褐色土上でピット群（柱穴？）が検出されましたが、ここからも遺物は見つかりませんでした。（ナカシャクリエイテフ株式会社 廣瀬正嗣）



写真1 六文銭
(寛永通宝)出土状況



写真2 トレンチ掘削風景



写真3 A区西側全景 (東より) 写真奥B区

設楽発掘通信

No.8

平成27年1月15日号



編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方8022の24

電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力

ナカシャクリエイテフ株式会社